

研究ノート

図書館内における「滞在」と「利用」

Contexts of staying and uses of spaces in library

村主千賀*

Chika MURANUSHI

キーワード：図書館サービス サードプレイス 閲覧サービス

Key Word : library service third place in-library use

抄録

本研究は様々な記事や文献をレビューすることによって、場としての図書館について、どのような話題の中でどのように言及しているかを明らかにした。場としての図書館という文脈においては、施設や建物の計画と建築、行政、利用研究の他、日常生活における居場所、心をサポートする場所としてとらえられていることがわかった。

abstract

This study analyses the expressions concerning library as 'place' or 'space' in the context in which they are used in the discussion of the nature of libraries. By reviewing various articles and literature, this study has identified which topics are mentioned and how they are mentioned.

1. 研究の背景と目的

図書館をとりまく情報環境とコレクションの電子化がすすみ、図書館へ行かずとも情報へのアクセスが保証されるようになった。電子図書館が現実味を帯びるその前段階から、いずれ図書館は無くなる、もしくはライブラリアンは不要になるのではないかという議論がなされてきた。一方で「場所としての図書館」（「場としてのとしての図書館」ともいう）という観点から、図書館の機能や役割について再評価するという動向もあった（根本，2005）。

「場としての図書館」という概念が普及し、「図書館の在り方」について多くとりあげられるようになっていたが、日本においては *The Library as Place: History, Community, and Culture* の

* 東海学園大学人文学部人文学科

翻訳（『場としての図書館』）（Bushman, Leckie, 2006）が大きな役割を果たしただろう。また、コミュニティの核になる「とびきり居心地の良い場所」を標ぼうする *The Great Good Place* の翻訳（『サードプレイス』）（Oldenburg, 1989）によって、職場でも学校でもない、第三の居場所の候補として図書館への注目も集まるようになった（久野, 2010）。

日本の図書館サービスを振り返って見ると、『中小都市における公共図書館の運営』（通称中小レポート）（日本図書館協会, 1963）、『市民の図書館』（日本図書館協会, 1970）以来、資料提供に重心を置き、貸出サービスを重視してきた。借りた本を持ち帰って読書するというスタイルが定着した。貸出偏重はやがて「無料貸本屋」論争を招くことになった（根本, 2011）。館内では、主に禁帯出であることが多いレファレンスコレクションの利用や、図書館の契約するオンラインデータベースの利用などが中心で、ゆっくり「読書をする場」として見られることは少なかったと言える。次第に日本の公共図書館は貸出を主機能とする図書館から、施設を巨大化し、居心地をよくすることで快適な公共施設であることを強調した図書館が作られるようになり、新しい公共図書館の出現は話題を集めていった。

ささいな調べものならば、Googleのようなサーチエンジンを利用すればたやすく情報は手に入る。COVID-19のパンデミックのさなかには「非来館型サービス」として、様々な方法でいかに利用者サービスするかについて、図書館は努力を払ってきた。そして図書館という「館」に行かず図書館を利用することは市民生活にも受け入れられていった。事実、日本ではこのパンデミックを機に電子図書館サービスの普及率は伸びている*¹。一方で、パンデミックの前も後も、人々は図書館の「館」へと向かっている。

滞在型図書館への言及は1990年代にはみられるが（植松, 1995）、2000年以降になると、滞在型を標榜する工夫のこらされた建築や調度品を備えた公立図書館、もしくはそれを含む大型の複合施設が新規に建設されるようになり、その場所、施設、設備が注目されることが多くなった（根本, 坂牛, 2015）。

図書館という場所、建物・施設について学術的な論考からニュース記事に至るまで様々な言及がなされており、よくまとめられたレビューも存在する。「滞在型図書館」「場としての図書館」「サードプレイス」「居場所」という図書館の在り方を表す言葉がある程度定着し、これらは多様な文脈に現われている。図書館の在り方について、誰が語っているか、何のために語っているか、なぜそうでなくてはならないのか、図書館に求められている役割と機能を再認識することが必要であると考えられる。そこで、本研究は図書館の在り方に関する論考のうち、「場所」または「場」（スペース、プレイス）に関する表現について、それが語られる文脈から整理することを目的とする。

2. 場所・施設として図書館を見る

2.1 「場所としての図書館」

2005年時点で場所としての図書館をめぐる議論については、根本によるレビューがある。図書館の本質を見直し、「場所としての図書館」「建物としての図書館」を再評価する動きをとらえている。その冒頭で、「場所としての図書館」という用語は、“the library as place”の訳語であるとし、これを「場としての図書館」と訳すことが妥当でないとも述べている。そして学術用語の「場」は通常“field”の訳語であり、重力場とか、磁場という目に見えない力の作用が働くところを意味し、“place”にはそうした意味はないと論拠を示している。本レビューでは電子図書館と場所としての図書館の二項対立とみせながら、実は基本的に異なった存在であるとし、場所としての図書館論、図書館機能の再認識、そしてデジタル時代においてなお建設されつづける図書館について解説している（根本、2005）。

しかしながら、川崎らは *The Library as Place* の邦題を『場としての図書館』として発表した。記者あとかきでは、この複数の著者からなる本書において各執筆者が“space”と“place”という語を一貫して使用していないことを指摘している。そのため翻訳においてはそれぞれ“space”をスペース、“place”を「場」と便宜的に一貫して使用したこと、また、類似の言葉（location, site, ground 等）についても文脈に応じて「場所」「位置」などと訳したと述べている。根本の指摘するような日本語の語感からの「場」という語に訳すことの不適當を認めつつ、むしろ原書中の用語のばらつきから、包括的な語として「場」という語を用いらざるをえなかったと推察する。

2020年の『図書館情報学用語辞典第5版』にはないが、2023年の『図書館情報学事典』では「場としての図書館」は一つの項目として取り上げられている。ここでの「場」は、人々が集う開かれた物理的な「場としての図書館」としており、これは根本のいう「場所」の意味での場であると言える。

2.2 サードプレイス

近年、サードプレイスとしての公共図書館の役割や存在価値について取りざたされるようになった。そのきっかけの一つはCCCが指定管理者となり、カフェと書店が併設された武雄図書館が注目を集めたことであろう。武雄図書館の話題の中でもとりわけ大きな注目を集めたのはスターバックスの併設である。スターバックスとサードプレイスは親和性が高い。スターバックスはマーケティングコンセプトとして盛んにサードプレイスを打ち出していき、日本においても、“スターバックスでは、日本上陸以来「サードプレイス」という概念を提唱してきました。サードプレイスとは、自宅でも職場でもない、第3のリラックスできる場所のこと”^{*2}と表明し、その姿勢を貫いてきた。

ところで、スターバックスについて、『サードプレイス』に付されたモラスキーによる解説では、

本書がスターバックスへ言及してはいないことを指摘している（モラスキー，2013）

また、『サードプレイス』の原著タイトルは *The Great Good Place* であり，サブタイトルは “*Café, Coffee Shop, Book Shop, Bar, Hair Salon*” である。邦訳書の帯には“居酒屋，カフェ，本屋，図書館”とあり，情報・意見交換の場，地域活動の拠点として機能するサードプレイスの概念・・・(略)”となぜか図書館が登場している。図書館はどこから出てきたのかは不明である。

2.3 滞在型図書館とは

2.3.1 用語としての「滞在型図書館」

今日の日本では「滞在型図書館」を標ぼうする図書館が数多くみられるようになった。

図書館では，滞在型図書館あるいは滞在型サービスについて，少なくともその「言い回し」は定着してきていると言える。しかし，論文においてキーワードとして挙げている例はあるものの，図書館情報学分野の用語辞典，専門事典では「滞在型図書館」という項目はない。

また，英文抄録付きのものを見てみると，「滞在型図書館」に対する訳語が一定していないか，もしくは日本語抄録にあっても，英文抄録には該当する語がみられないものもある（糸賀，内藤2010）。

英文抄録にみられた表現のうち，おそらく「滞在型図書館」の訳語と思われる “stay-type library” は，図書館情報学の専門用語辞典，専門事典には表現はない。図書館情報学研究者である Dewer 氏へのインタビュー*³においては，“stay-type library, long stay type などの表現は，英語話者に違和感を与えるものであり，実際には図書館に滞在することは前提なので，改めてそういう用語で表すことはない”ということであった。

2.3.2 閲覧とは：図書館の館内利用を表す語として

資料の館内利用を指す言葉として「閲覧」がある。国語辞典では閲覧は“書物や書類などの内容を調べながら読むこと，また読むことを改まっていう語。閲読”と説明される（小学館国語辞典編集部，2006）。それよりは，日本の図書館における用語としての閲覧は広義の意味で使われる。『図書館情報学用語辞典』（日本図書館情報学会，2020）では，“図書館内での図書館資料の利用のこと。利用者の図書館資料へのアクセスおよび特定された資料の館内利用の両方を含む。”と説明される。対応する英語は in-library use という用語である。

ALA の用語辞典（Young，1989）は日本語から引くと，閲覧室 = reading room，閲覧目録 = public catalog，閲覧者 = reader という語がある。しかし直接的に閲覧に合致する言葉はみられない。

2.4 検索結果からみる「滞在型図書館」

滞在型図書館を検索語とした CiNii Research の検索結果では、掲載誌からは図書館関連分野、社会教育関連分野、建築分野が関心を持っていることがわかる。「滞在型図書館」の文献上の初出は特定できなかったが、植松は“1990年に入ってから公共図書館の次の発展段階は滞在型図書館であると言われている”と述べている（植松，1995，1999）。「～言われている」という表現からは、植松がいずれかの資料を参照したものであると推察されるが、残念ながら引用が示されていない。

そのほか、Google サーチエンジンによる検索では、各地の公立図書館の新設に関する記事や指定管理者を請け負う事業者の事業計画書などが得られる*4。

2.5 公立図書館像としての「滞在型図書館」

坂本は社会教育施設としての公立図書館には、コミュニティスペースと課題解決図書館であることが求められると指摘している。そこでは情報提供機能以外にコミュニティの文化活動支援を支援するコミュニティスペースとしての活用が期待され、それが滞在型図書館と呼ばれていると述べている（坂本，2018）

社会と図書館の観点から、2009年～2017年を対象としたレビュー（山口，2018）では、「まちづくり」というキーワードが含まれる図書館関係の論文が2000年代中盤より増加してくると述べられている。専門誌の他、他分野のジャーナルにも特集され、その中には図書館の集客力に期待した「にぎわい」や「まちおこし」とセットで語られることがあると指摘されている。また、図書館界において「まちづくり」という用語は多様な意味で用いられていることも併せて指摘されている。

「まちづくり」という観点から、2000年代に建築もしくはリニューアルされた公立図書館を見てみると、まず前述の佐賀県武雄市の武雄図書館をあげることができる。武雄図書館は滞在型図書館のいわば旗艦店のような存在であったと言える。東海地区では、岐阜市、小牧市、安城市の中央図書館がそれぞれ滞在型図書館を標榜している。岐阜市立中央図書館はリニューアルに際して複合施設「みんなの森ぎふメディアコスモス」に組み込まれた。オープンに際して民間から採用された吉成信夫前館長によれば、“当初「滞在型図書館」というコンセプトだけがあり、着地点は決まっていなかった”ということである。「滞在型図書館」というコンセプトは設計者の建築コンセプトにあったものである。居場所づくり、サードプレイス、ビジネス支援など、市民協働を考えた図書館である。

安城市のアンフォーレは図書館と商業施設からなる複合施設で2017年に開館した。広々としたエントランスと吹き抜け、多様なコーナーの設置や施設内のカフェ併設という施設概要を見れば、これは施設としては「滞在型図書館」に合致している。また町の賑わいを意識していること

からは、まちづくりの核となる施設である（岡部，2023）。

小牧市中央図書館は2021年3月に開館した。“市民を駅前に引き寄せる”“多様な居場所を提供する滞在型図書館”と紹介される。来館者数は、21年3月～6月末までの集計で1日平均数がコロナ禍前の5.4倍となった。この伸び率は“緊急事態宣言期間やまん延防止等重点措置期間を含む期間でありながら”と強調された（宮永，2021）。このような集客数の伸びは人々が図書館に寄せる期待や、図書館の場所としての力が発揮された証と言えるのではないか。

3. 「場所」としての図書館：心の居場所，集まる場所，コミュニティの核

3.1 図書館に「集まる」という文脈

3.1.1 コミュニティへの一員として「集まる」

アンドリュー・カーネギーの図書館を表す言葉からタイトルを得た *Palaces for the People* (Klinenberg, 2018) は翻訳書では『集まる場所が必要だ』（藤原，2021）と題されている。本書は、パンデミックの前の2018年に出版され、翻訳は2021年に出版された。ちょうどコロナ禍をまたぐ形で出版されたこの翻訳書の帯には“ここには誰にも居場所がある。あらゆる人が受け入れられる「社会的インフラ」では何が行われ、何が生まれているのか”，そして“コロナ禍を経験した今こそ、私たちには集まる場所が必要だ”と書かれている。本書はシカゴ熱波における経験から、あるいは大きなハリケーン災害の経験から、孤独、孤立に陥らないためのコミュニティの一員としての居場所の重要性を説いている。このことから、翻訳書はこのような紹介となっているのであろう。

本書は世界中で人々がオンラインではなく物理的に集まれる場所が評価されていることをあげ、その「物理的に集まれる場所」の一つが図書館であるとして、図書館の存在価値を説く。図書館が「宮殿」であるという思想は、オリジナルのカーネギー図書館が高い窓と、吹き抜けの構造を持つ壮麗なデザインであったことに現れている。図書館が日常生活のプレッシャーから人々を解放し、インスピレーションを与えるものであれという思想である。本書はそのような図書館こそが必要とされている社会インフラであることを主張し、現在のIT成功者たちの寄付や社会活動は、カーネギーの寄付に比べて、どれほど不十分なものを訴えている。

3.1.2 描かれた「集まる場所」としての図書館

図書館が資料利用だけの場所でないことは、外国において史的事実として振り返ることができる。1947年、サンフランシスコのケーブルカー廃止に関して反対運動が起こった。反対する市民たちは図書館に集まって反対集会を開き話し合うが、この史実は *Maybelle the Cable Car* (Burton1952) と題する絵本に紹介されている。また、事実にもとづいた図書館の「集まる機能」が描かれているものとして、ベネズエラのラ・ウルビナ図書館を舞台にした *La calle es libre* が

あげられる。内容は、遊び場を無くした子どもたちが図書館にあつまり、図書館員の力をかりて活動を起こし、やがて公園を勝ち取るというものである。これらに描かれているのは、ある活動のために「集まる場所」である。

映画の中にも「人が集まってくる」場所としての図書館の姿を見ることができる。ドキュメンタリー「ニューヨーク公共図書館」(Wiseman, 2017)では、実に様々な事情、理由で図書館に人が集まる。著名な作家の講演会などのイベントから、就職相談にいたるまで、図書館は町のインフラそのものであることが見て取れる。一方、フィクションであるが極寒の一夜をしのぐ居場所を求めホームレスが「集まり占拠する」騒動を描いた映画もある (Estevez, 2018)。

図書館のコレクションを利用しようとすまいと人は図書館に集まる。図書館の館内は資料を利用するだけの場所でないことは自明である。

3.2 「自殺する前に図書館へ」の意義

3.2.1 課題解決の場所としての図書館：アメリカの図書館ポスター

45 / Making It Work

Figure 3
SAMPLE CLIPHS



IF YOU FEEL LIKE SHOOTING YOURSELF, DON'T.
COME TO THE LIBRARY FOR HELP INSTEAD.

We have guides, aids, bibliographies,
and librarians to help you with your
library research problems.

図1 自殺する前に図書館へ
(Roberts 1982)

“IF YOU FEEL LIKE SHOOTING YOURSELF DON'T. COME TO THE LIBRARY FOR HELP INSTEAD.”というキャプションとそれにつづく “We have guides, aids, bibliographies, and librarians to help you with your library research problems.” というフレーズをともなった図書館ポスターがアメリカの図書館にある [図1]。このポスターは竹内愨や常世田良によって紹介された後、幾度となく図書館の役割について言及される際に引用されている。ピストルを頭にあてた人のイラストの下部のキャッチフレーズに続くのは問題状況、課題を抱えたときにライブラリアンや図書館にある多様な資料がその課題解決に役に立つよ、という呼びかけである。このポスターはライブラリアンの教科書 (Roberts, 1982) に引用されている。

このポスターはしばしば日本の SNS で言及されてきた。どちらかと言えば、鎌倉図書館の投稿 (後述) を連想するような、「逃げ場」のニュアンスを含む「居場所」としての図書館の例として引用される。このポスターは読売新聞の医療関連情報 web サイト^{*5}や虫賀によると、2001年に竹内愨によって紹介された (虫賀, 2005)。その際は、心のよりどころや、居場所を求めるならば図書館があるといった文脈における紹介であった。

2004年に常世田が紹介した際には、ポスター下部のテキストに示されるように、情報を得ることによって問題解決をするという立場での引用であった^{*6}。「自殺する前に図書館へ」というポ

スターは、日本の公共図書館を語る上で、問題を解決する手がかりとしての図書館すなわち「情報利用の場所」と、「居場所としての図書館」の2つの側面から受け入れられていったのである。

3.2.2 「心の居場所」もしくは“refuge”としての図書館

2015年8月28日のTwitter（現X）への鎌倉図書館による投稿は、図書館関係者だけでなく、一般社会においても話題となった。それは“もうすぐ二学期。学校が始まるのが死ぬほどつらい子は、学校を休んで図書館へいらっしやい”というもので、ある意味学校ではない居場所、「逃げ場所」として図書館があるのだと呼びかけるものであった。「学校を休んで図書館へ来い」などという内容から、不適切表現であるという反応もあり、削除すべきという議論もあったものの、9.4万回のリポスト、780回の引用、7.8万回の「いいね」、252のブックマークを記録し、8年後の今も削除されていない^{*7}。単なる話題性だけでなく、共感または反論を多く得ることになり、それは衝撃的であったと言える。またこの少し前に、千葉県柏市の公共図書館で同様の内容と呼びかけるポストカードの配布が行われており^{*8}、少なくとも公共図書館側ではそういった場所である（ありたい）という意識があったことがうかがえる。

これより少し遡る2009年には文部科学省は「いじめ問題などに対する喫緊の提案について」の中で、教員や保護者以外の地域の大人と接することのできる居場所作りの必要性を示した^{*9}。その居場所の例には学校図書館を含んでいた。また、文部科学省は2019年に不登校児童生徒の受け入れ先として保健室、相談室の他に学校図書館の活用を促し、“徐々に学校生活への適応を図っていけるような指導上の工夫”が必要であると提言している^{*10}。瀧脇らはこのような場所を「心の居場所」ととらえ、質問調査を実施しそのような場所の条件を探っている。

公共図書館は、鎌倉図書館の「一日いても誰も何も言わないよ」という呼びかけにあるように、そもそも利用者のプライバシーには関与しない。これに対し、学校図書館は教員ではない大人との関わりを持つことを含みながらも、児童生徒の居場所となることを示唆している。

鎌倉図書館の投稿が話題となる10年も前に虫賀は悩んでいる大学生に「自殺したくなったら能登川図書館へ行こう」と呼びかける自らの体験をつづっている（虫賀，2005）。公立の能登川図書館が公共スペースでありながら世間の視線が消える「私の居場所」となるといい、図書館だから本を読まなくていい、その居場所で目をつむって眠ればいいと言う。虫賀はそのほかに、人の生活の傍らに寄り添うような、地方の公共図書館を紹介している。

3.3 大学図書館という場所

大学図書館は貸出の他に、閲覧サービスも大きな役割を果たしている。館内での資料利用の理由は、移動が不可能なほどの大量の資料を一度に閲覧するとか、禁帯出の資料が必要な場合である。またデータベースアクセスが可能な環境として館内を利用することになる。その場合は静謐

が保たれ、原則個人での利用が主たる利用方法である。

一方、アクティブラーニングが実践されるようになると、ディスカッションや、学生たちの創造性を促す空間が求められるようになる。声を出すことを許され、大きなテーブルに集まった共同作業を可能とする「場所」がラーニングコモンズともいわれる。ラーニングコモンズは“学生の学習支援を意図して大学図書館に設けられた場所や施設。具体的には、情報通信環境が整い、自習やグループ学習用の家具や設備が用意され、相談係がいる開放的な学習空間”で“日本では2000年代後半に導入が始まった”と説明される（日本図書館情報学会，2020）。

その2000年代には斬新なデザインの大学図書館がいくつか建設されている。中でも「創造する図書館」をコンセプトとする多摩美術大学図書館は、高い天井やラウンジソファの設置などから、滞在型（公共）図書館に通じるところがある。また、閲覧室の大きなテーブルの設置はラーニングコモンズ型であり、アーケードギャラリーの併設は公共図書館を内包する総合型施設のようでもある。その図書館全体は“創作意欲をかき立てる洞窟のような落ち着き”と表現される。ラーニングコモンズスペースを図書館のどこかに配置するというのではなく、図書館という「場所」がその大学の学びや創造にとってどのようにあるべきかを追求したものとなっている（佐野，2007）。

3.4 文献上の「居場所」

文献検索からは、図書館に関して「居場所」という語が現れる場合、「居場所としての図書館」「図書館内での利用者の居場所」という2つの文脈から語られる。前者はサードプレイス的な利用の場所として、「癒し」「安らぎ」「居心地」「ぬくもり」などの言葉を伴って表される。また後者は閲覧における利用場所、動線などの物理的な利用に関する研究の文脈で、建築学、図書館情報学の研究対象になっており、公共図書館、大学図書館を対象にした椅子や机の占有の様子や動線、来館目的と利用施設の利用実態などを観察調査から明らかにするものなどがある。

4. まとめ

図書館の場（場所）としての機能や価値は再認識されている。日本においては「滞在型図書館」という新しい公共図書館スタイルとして定着し、実在する図書館建築やその内装に現れる。開放的なホールや、人が集う多目的室など、かつての「閲覧室」とは異なる空間が用意されることで、人が話し合いの場や「集まる場所」の機能も十分に持つようになったと言える。「滞在型図書館」は孤独を癒すことも、また一人で静寂を味わうことも、その両面を実現可能な物理的な場所として存在する。大学校図書館においても、必ずしも静寂を必要としないエリア（ラーニングコモンズ）が設けられるようになった。これにより、従来の閲覧利用だけでなく、多様な目的で活動する場所となっている。

学校図書館に求められる主要な機能は読書習慣や調べ学習による課題解決能力をはぐくむことである。しかし、不登校やいじめ問題に直面する学校としては、切実な「居場所」機能をも期待されている。

注

1. 電子出版制作・流通協議会による公共図書館電子図書館自治体別導入館資料 2023年10月1日発表資料
https://aebs.or.jp/Electronic_library_introduction_record.html
2. スターバックス Japan ホームページより (2023.10.31 確認)
https://stories.starbucks.co.jp/ja/stories/2022/community_store3/
3. Dewey, Andrew 東海学院大学教授 stay-type library という語の違和感にはじまり、北米地域でのライブラリアンとしての経験や、日本の図書館の学習室や閲覧室での「勉強」は「滞在」であるのにそれを滞在とは言ってこなかったこと、持ち込み資料による学習を許さない「閲覧」は欧米の図書館から見ると奇異に映ることなど、多くの示唆をいただいた。
4. 例えば、世田谷区の指定管理者制度導入施設一覧にある図書館の資料をあたると、烏山図書館、経堂図書館などの事業計画書などには「滞在型図書館」「滞在型サービス」などの取り組みについて述べられている。
5. Yomi Dr. 2015.10.15の記事 (最終確認 2023.10.30)
<https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20151015-OYTEW52659/>
6. 2004年5月29日(土) 明治大学アカデミーコモン アカデミーホールにて開催された「ディスカバー図書館2004」図書館をもっと身近に暮らしの中に」は文部科学省と日本図書館協会が共催した図書館振興のためのイベント。この中でパネラーの常世田良(浦安市教育委員会生涯学習部次長:当時)によって紹介された。この模様はNHKで放送され、記録として2004年10月に同タイトルで日本図書館協会から出版された。
7. 最終確認日 2023年10月21日時点
8. 柏図書館が「死にたくなったら図書館においで」ライブドアニュース 2016.4.7日のポストによれば、2015年8月上旬千葉県柏市において、版画家大野隆司によるポストカードが無料配布された。
<https://news.livedoor.com/article/detail/11388440/>
9. 文部科学省「いじめ問題などに対する喫緊の提案について」平成18年12月4日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/040/toushin/06120713.htm
10. 文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」令和元年10月25日
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm

文献表

- 糸賀雅児, 内藤沙織, 2010. 館内閲覧量の測定: 公共図書館内で資料が読まれた量を把握する試み. 日本図書館情報学会誌 65 (4): 177-189
- 植松貞夫, 1995. 滞在型図書館 (「施設」のなかの住居: 特集「施設」の意味を問う), 建築雑誌, 110 (1370): 44-45
- 植松貞夫, 1999. 建築から図書館を見る. 勉強出版
- 岡部晋, 2023. アンフォーレのつくりかた. 樹村房
- 久野和子, 2010. 「第三の場」としての図書館, 京大大学生涯教育学・図書館情報学研究 9: 109-121
- 小室祐樹, 小櫻美樹, 尾澤咲他, 2018. 日本の公共図書館における館内環境要素. 図書館界 70 (4): 539-549
- 坂本俊, 2018. 「これからの図書館像」に見る窓口としての公立図書館像. 京都女子大学図書館情報学研究紀要 5: 13-16
- 佐野由佳, 2007. 多摩美術大学附属図書館. 日経アーキテクチュア 854: 54-65
- 小学館国語辞典編集部編, 2006. 精選版日本国語大事典. 小学館
- 瀧脇真奈, 池田光雪, 2020. 心の居場所としての学校図書館に対する生徒の認識に関する一考察. 中部図書館情報学会誌, 60: 39-41
- 小学館国語辞典編集部, 2006. 精選版日本国語大辞典 小学館 (電子版)
- 日本図書館協会, 1963. 中小都市における公共図書館の運営.
- 日本図書館協会, 1970. 市民の図書館.
- 日本図書館情報学会, 2020. 図書館情報学用語辞典 第5版
- 日本図書館情報学会, 2023. 場としての図書館. 図書館情報学事典 492-493
- 日本図書館情報学会, 2023. 資料提供サービスと空間提供サービス. 図書館情報学事典 504-505
- 根本彰, 2005. 「場としての図書館」をめぐる議論. カレントアウェアネス 286: 21-25
- 根本彰, 2011. 理想の図書館とは何か. ミネルヴァ書房.
- 根本昌汰, 坂牛卓, 2015. 複合公共図書館の図書空間の公共性に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集 113-114
- 原田昌幸, 八十田誉人, 2022. ぎふメディアコスモス (図書館) における座席を利用する高校生の学習行動とエリア選択. 日本建築学会計画系論文集 87 (792): 295-306
- 宮永博之, 2021. 本と過ごす居場所を創出: 小牧市中央図書館 (フォーカス「建築」). 日経アーキテクチュア 1199: 60-69
- 虫賀宗博, 2005. 私の居場所: 自殺しなくなったら, 図書館に行こう (いのちを育てる図書館員の群像). 世界 742: 214-225
- 山口真也, 2018. 社会と図書館: まちづくり・社会的包摂. 図書館界 70 (1): 11-21
- 吉成信夫, 2017. 滞在型図書館運営のためのマネジメントと職員の意識改革 (特集 まちづくりを担う公共図書館とFM). JAFMA Journal 187: 26-29
- 渡辺幸倫, 川村千鶴子, 金塚基他, 2019. 多文化社会の社会教育: 公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」. 明石書店

- Burton, V. Lee, 1952. *Maybelle the Cable Car*. Houghton Mifflin Harcourt Publishing co. 秋野翔一郎訳, 2011. 坂の街のケーブルカー. 童話館出版(同書の翻訳には他に桂宥子, 石井桃子訳, 1980. 小さいケーブルカーのメーベル. ペンギン社がある)
- Bushman, J. E, Leckie, G. J, 2006. *The Library as Place: History, Community, and Culture*. Libraries Unlimited. /川崎良孝, 久野和子, 村上加代子訳, 2008. 場としての図書館:歴史, コミュニティ, 文化. 京都大学図書館情報学研究会
- Estevez, Emilio, 2018. *The Public*. /パブリック:図書館の奇跡 2020年 日本公開
- Klinenberg, Eric, 2018. *Palaces for the People: How Social Infrastructure can Help Fight Inequality, Polarization, and the Decline of Civil Life*. Broadway Books /藤原朝子訳, 2021. 集まる場所が必要だ:孤独を防ぎ, 暮らしを守る「開かれた場所」の社会学. 英治出版.
- Kurusa, Doppert, Monika, 1981. *La calle libre*. Ediciones Ekaré /岡野富茂子, 岡野恭介訳, 2013. 道はみんなのもの. さ・え・ら書房
- Oldenburg, Ray, 1989. *The Great Good Place: Cafés, Coffee Shop, Book Shop, Bar, Hair Salon and Other Hangouts at the Heart of a Community*. Perseus books group. /忠平美幸訳, 2013年. サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」. みすず書房. 翻訳書は原著の第2版に基づく。なおマイク・モラスキーによる解説が付されている
- Roberts, Anne F, 1982. *Library Instruction for Librarians* (Library science text series). Libraries Unlimited.
- Wiseman, Frederick, 2017. *Ex Libris: The New York Public Library*. /エクス・リブリス ニューヨーク 公共図書館 2019年日本公開
- Young, Hearts 編, 丸山昭二郎, 高鷺忠美, 坂本博監訳, 1988. ALA 図書館情報学辞典. 丸善